

鶏卵



◆飼養動向

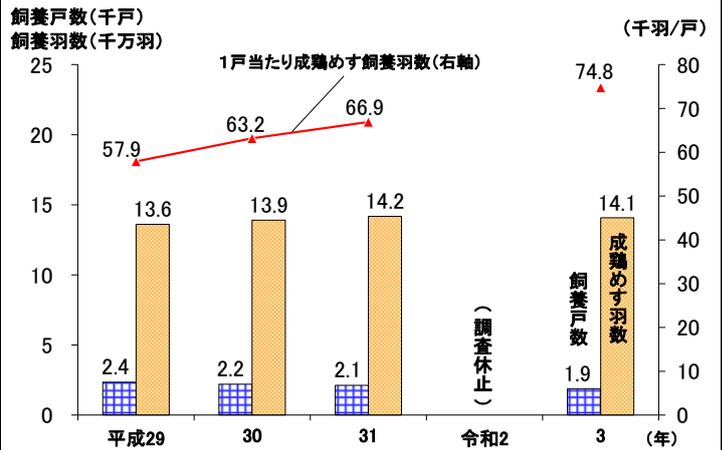
3年2月現在の採卵鶏飼養羽数、平成31年比2.2%減

採卵鶏の飼養戸数は、小規模飼養者層を中心に減少傾向で推移しており、令和3年は1880戸（平成31年比11.3%減）と平成31年をかなり大きく下回った（図1）。飼養羽数は、近年増加傾向で推移していたものの、令和3年は高病原性鳥インフルエンザの発生の影響などにより減少し、1億8092万羽（同2.2%減）となった。このうち実際に産卵を行う成鶏めすの飼養羽数は1億4070万羽（同0.8%減）となった。

この結果、1戸当たりの平均成鶏めす飼養羽数は平成31年から7917羽増となる7万4800羽（同11.8%増）と31年をかなり大きく上回り、生産規模の拡大が進んでいることがうかがえる。

なお、成鶏めすの飼養戸数および飼養羽数を規模別に見ると、成鶏めすを10万羽以上を飼養する層は、飼養戸数全体の20%を、飼養羽数全体の80%をそれぞれ占めた。

図1 採卵鶏の飼養戸数および成鶏めす羽数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」
 注1：各年2月1日現在。
 注2：成鶏めすとは、種鶏を除く6カ月齢以上のめすをいう。
 注3：飼養戸数は、種鶏のみの飼養者を除く。
 注4：令和2年は農林業センサス実施年のため、調査休止。

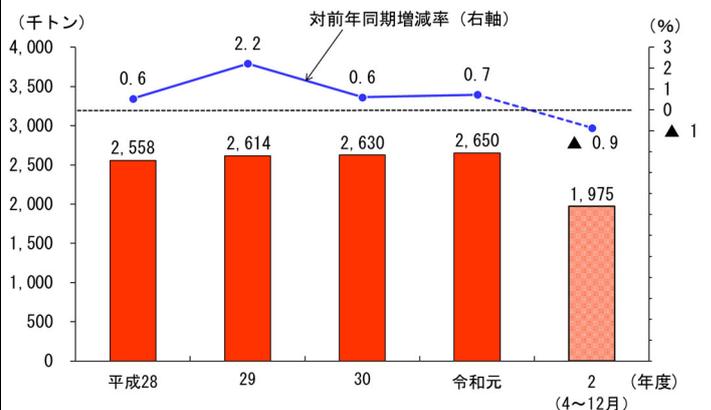
◆生産

2年度4～12月の生産量、前年同期比0.9%減

鶏卵生産量は、これまで250万トン前後でおおむね安定して推移してきたが、近年、好調な鶏卵相場を受け、生産者の増産意欲が高まっており、増加傾向で推移している。令和元年度は264万9875トン（前年度比0.7%増）と過去最高となった（図2）。

2年度の4～12月は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により価格が低水準で推移したことや高病原性鳥インフルエンザの発生により採卵鶏の殺処分羽数が多かったことから減少し、197万4741トン（前年同期比0.9%減）と前年同期をわずかに下回った。

図2 鶏卵生産量の推移



資料：農林水産省「鶏卵流通統計」
 注：令和3年1月以降のデータは未公表。

◆ 輸 入

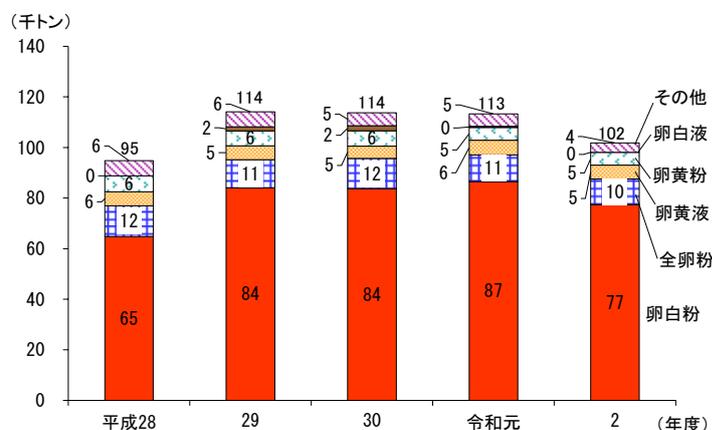
2年度の輸入量、前年度比10.1%減

鶏卵（ふ化用除く）の輸入量（殻付き換算）は、国内消費量の4%程度で推移している。輸入量の約9割が保存性に優れ、輸送コストの安い加工原料用の粉卵であり、主にオランダ、イタリアおよび米国から輸入している。なお、粉卵の輸入量のうち8割は卵白粉であり、ハム・ソーセージのつなぎの原料などに使用されている（図3）。

主要な供給国である米国で発生した高病原性鳥インフルエンザの影響から、卵白粉の国際価格が上昇したことなどにより、平成28年度は10万トンを超えて減少したが、卵白粉の国際価格が落ち着いたことから29年度以降は11万トン台で推移している。

令和2年度は、COVID-19の影響による需要の減少などにより、10万1820トン（前年度比10.1%減）と前年度をかなりの程度下回った。

図3 鶏卵輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：殻付き換算ベース。

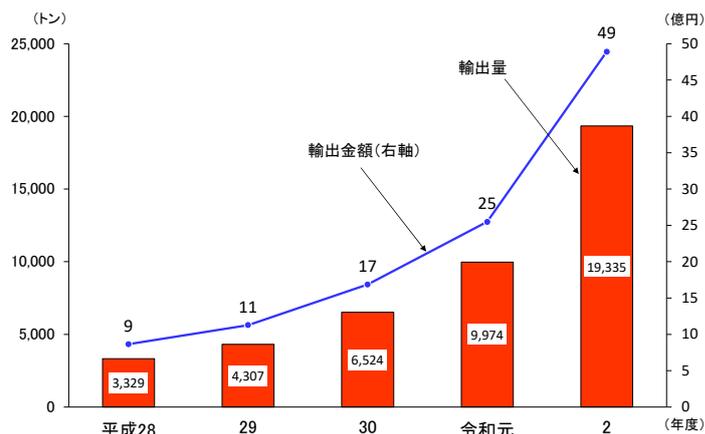
◆ 輸 出

2年度の輸出量、前年度比93.8%増

近年、鶏卵の輸出量は、生食可能な品質が評価され、増加傾向で推移している。令和2年度は、COVID-19の影響で、最大の輸出先である香港において内食化が進んだことなどから、鶏卵（殻付き卵）の輸出量は1万9335トン（前年度比93.8%増）、輸出額は48億9034万円（同91.8%増）となった（図4）。

輸出先を見ると、香港（1万8957トン、47億5689万円）、シンガポール（308トン、1億1371万円）のほか、台湾、マカオ、グアム（米国）に輸出されており、輸出量の98%が香港向けとなっている。

図4 鶏卵の輸出量および輸出金額の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：殻付き卵（食用）。

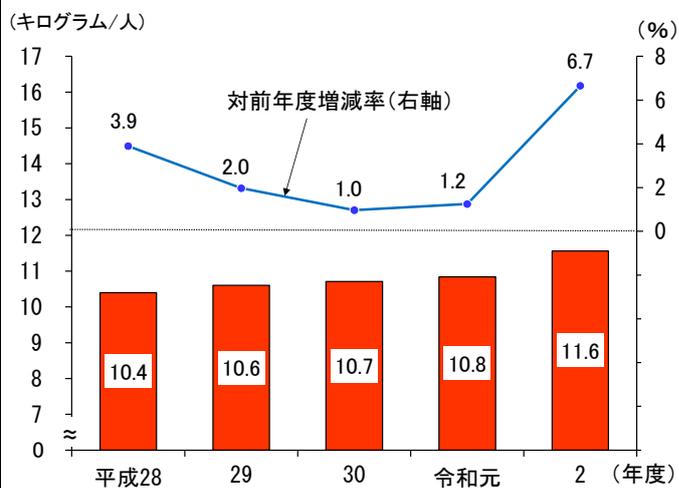
◆消費

2年度の1人当たり家計消費量、前年度比6.7%増

鶏卵の家計消費量は、テーブルエッグに加え、近年、食の簡便化に対応してコンビニエンスストアなどで販売されている卵加工品の需要の高まりを受けて増加傾向にある。

令和2年度は、COVID-19の影響による巣ごもり需要の増加などから、年間1人当たりの消費量が11.6キログラム（前年度比6.7%増）と7年連続で前年度を上回った（図5）。

図5 鶏卵の家計消費量（年間1人当たり）



資料：総務省「家計調査報告」

◆卸売価格

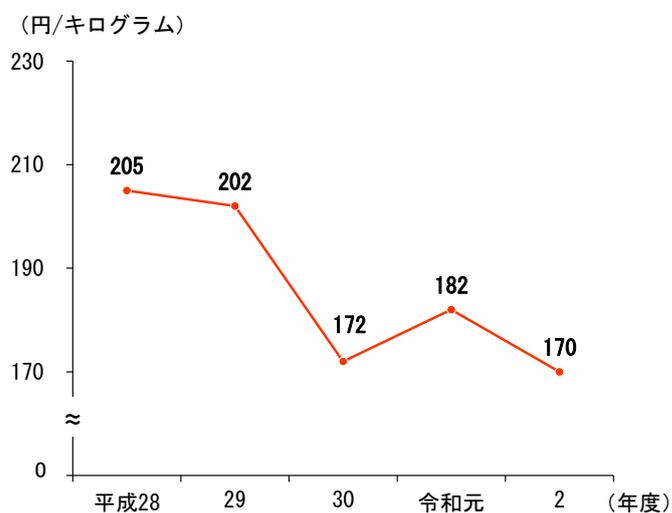
2年度の卸売価格、前年度比6.6%安

鶏卵卸売価格（東京全農系M玉）は、夏場の不需要期に向けて低下し、年末の需要期に向けて上昇する傾向がある。

鶏卵を使用したデザートやマヨネーズなどの加工向けを含めた旺盛な需要を背景に、平成27年度まで、卸売価格は上昇基調で推移していた。しかしながら、生産拡大が進み、需要を上回る供給が続いたことから、28年度以降、3年連続で前年度を下回って推移したが、令和元年度は、成鶏更新・空舎延長事業の取り組みや台風被害に伴う供給量の減少などを背景に卵価は回復し前年度を上回った。

2年度は、COVID-19の影響により業務用の需要が大幅に減少したことから、1キログラム当たり170円（前年度比6.6%安）と前年度をかなりの程度下回った（図6）。

図6 鶏卵の卸売価格（東京全農系M玉）

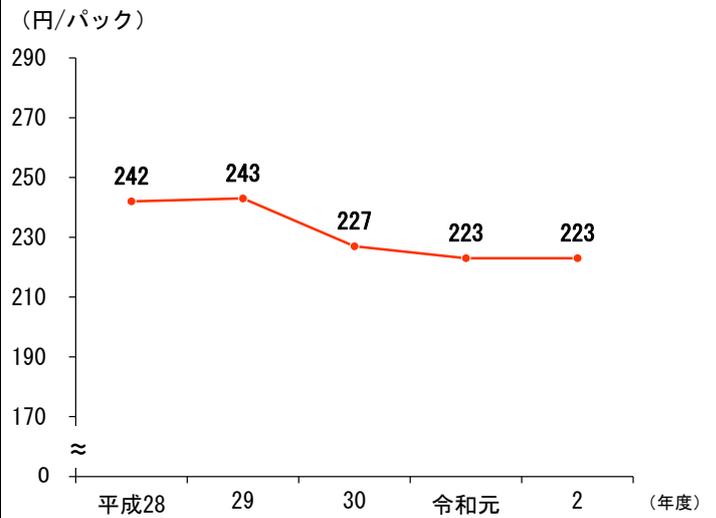
資料：JA全農たまご株式会社「相場情報」
注：消費税を含まない。

◆小売価格

2年度の小売価格、前年度並み

令和2年度は、鶏卵の卸売価格（東京全農系M玉）は前年を下回って推移したものの、COVID-19の影響による巣ごもり需要の増加などから、鶏卵小売価格（東京都区部）は1パック当たり223円（前年度同）と前年度並みとなった。（図7）。

図7 鶏卵の小売価格（東京都区部）



資料：総務省「小売物価統計調査」

注1：消費税を含む。

注2：価格は、平成29年12月以前はLサイズ。30年1月以降はサイズ混合（卵重「MS52g～LL76g未満」、「MS52g～L70g未満」または「MS58g～L70g未満」）。